公開講座 大人の教養倶楽部 －教養学の30年－私たちを取り巻く環境の変化

著者	宍戸 隆之，和田 正春，原 義彦，武田 敦志，杉浦 茂樹，天野 和彦，津上 誠，塚本 信也
雑誌名	人間情報学研究
号	28
ページ	95-100
発行年	2023-03-10
URL	http://id.nii.ac.jp/1204/00024858/

大人の教養倶楽部
－教養学の30年－私たちを取り巻く環境の変化

教養学部と人間情報学研究所の共催で、2017年度より「大人の教養倶楽部」が開催されております。この講座の趣旨は、教養学部における知的営みの幅広さと奥深さを知っていただくことを目的としております。学内で最も多くのスタッフを擁する教養学部は、同時に、そのスタッフを多種多様な学問領域から集めている学部でもあります。

教養学部創設33年を迎えた2022年度は、私たちを取り巻く環境の変化をテーマに選びました。選りすぐりの講師が「環境の変化」について、多種多様な分野からアプローチを試みました。

人間情報学研究では、「大人の教養倶楽部」で提供された講演内容の概要を記録の観点から掲載することにしています。

2022年度「大人の教養倶楽部」講演内容一覧

	開催日	テーマ	講演者
第１回	10／１	子どもたちを取り巻く運動習慣が学力に与える影響	宍戸隆之
第２回	10／８	「価値創造」の視点から見る社会の変化と未来を設計する力としての「　」	和田正春
第３回	10／15	幸せの国・デンマークの社会、人、学びの諸相	原　義彦
第４回	10／29	人工知能の発展の歴史と今後の課題－密集空間で求められる作法	武田敦志
第５回	11／５	コンピュータ・ネットワークの発展	杉浦茂樹
第６回	11／14	地域生活とスポーツ	天野和彦
第７回	11／19	現代日本社会における「家族」の変化と持続	津上　誠
第８回	11／26	外国語教育の30年－いわゆる第二外国語の場合－	塚本信也

「子どもたちを取り巻く運動習慣が学力に与える影響」

教養学部人間科学科
宍戸　隆之

近年、子どもたちの体力と学力との関連や一過性の運動と脳の認知機能との関連についての研究が多数報告されています。いわゆる運動習慣と学業成績が関連していることが示されています。

では、最近のコロナ禍の子どもたちの運動習慣は、どのようになっているでしょうか？想像に難しくなく、2020年からのこの３年間は、様々な活動を制限されてきました。中でも、運動習慣程制約を受けた活動はないと言っても過言ではありません。特に中学生や高校生の部活動の成果を発揮するインターハイ等の大会は、ことごとく中止の措置が取られ、毎日の練習をする部活動などの運動する機会の多くが奪われてしまいました。このような子どもたちの運動習慣の損失は、子どもたちの学力や脳の認知機能に対して悪影響を与えていることも容易に想像ができると思います。

大学生であっても同様の傾向が認められています。東北学院大学の学生の身体活動量について、この３年間調査してきましたが、緊急事態宣言が出された2020年度の身体活動量が有意に低くかったことが明らかとなりました。

30年前の子どもたちを取り巻いていた環境と近年の環境が大きく変化していることに加え、最近のコロナ禍の状況は、子どもたちの身体的・精神的な発育発達に大きな影響を与えています。

このような状況を踏まえると、子どもたちに運動する機会を積極的に作り、脳の健康と学力の向上に結びつく運動の機会を提供していくことが、社会に求められていると言えそうです。

「価値創造」の視点から見る社会の変化と未来を設計する力としての「　　」

教養学部地域構想学科
和田　正春

1980年代以降の社会の変化を、サービスというもののあり方から考えていこうというのが、今回の講演の主旨だった。

高度成長期以降、資本主義のシステムの原動力として、新たな欲望が生み出され続ける必要があった。70年代は「物の時代」で、新しい製品が常に話題になった。隣の家が買えばうちも、というような、常に隣の芝生の青さを見せられているような焦燥感が新たな欲望を生み出し続けた。それが80年代に入る頃には、その追求が極まり、高級品、高級ブランド品の消費が高まった。それでも青い芝生を求めて消費は活況を呈するが、高騰する高級品熱は大衆が追従出来る限度を容易に超えていった。（その熱はバブルの崩壊により一旦沈静することになる。）

その頃になると、消費を生み出す原動力は、隣の青い芝生に限らず、多様化していくことになる。その中心になるのがサービスである。サービスは顧客それぞれのニーズに個別に対応することを原則とする。もちろんサービスも物と同じように消費できないわけではない。行列覚悟で並ぶのも、経験を声高にアピールすることも可能である。しかしサービスは学習や経験の蓄積によって進化する。語学力がある人、旅行経験が豊富な人が、同じ海外旅行でも得られる経験が異なるように（そしてその差は容易に埋められない）、サービスは見える人にしか見えない広大な青い芝生を広げていった。自分が最も輝ける世界を求め、それを切り札にしながら、己の優位性を高めていく戦いを続けたのである。

資本主義の原動力は、その自己顕示的な欲求

であり、それを加速させるものが常に求められる。単純で爆発的な普及をもたらす物に対し、より深く、多様な連関を可能にし、はるかに強い社会的、心理的な欲求を持続的に発現させるサービスがその原動力の中心となる。以来社会では、インターネットがグローバルに広げる情報の波を利用して、サービスとその背景にある差別性を喧伝することが行われてきたのである。

しかし今日、その波に大きな変化が生じている。長く指摘されてきた資本主義の歪みが成長の中で吸収できないほどに極大化し、格差や対立が看過できない状況に至っている。もはやその軌道修正は免れない。とはいえ、この社会を支えている資本主義の枠組みは容易に解体できない。生まれてきた課題の解決を進めつつ、資本主義の仕組みの変容を促すようなことはないものか･･･

消費に深淵を与え、新たな可能性を増幅させる―そんなサービスの力を活かすことは出来ないか。環境問題、人口問題、地域課題など資本主義というマスが支配する枠組みの中で生じた問題の解決を、新しいコードとして読み込み、消費の力で社会を変革する。まだまだ戦力と言うには微力であるが、それでも変革の萌芽として日々注目されないことはない。30数年前、大学院時代に恩師から笑われながら、それでもやりたいならやってみなさい、といわれたサービスの研究。立派に曲学阿世の徒となったが、変わらず世の中に問い続けることは出来た。これからも死ぬまでそれを続けていきたい。その舞台がこの地だったことは何かの縁があるのだろう。感謝（^^）V

「幸せな国・デンマークの社会、人、学びの諸相」

教養学部人間科学科
原　義彦

この講座では、デンマーク発祥の成人教育施設、フォルケホイスコーレ（folkehøjskole）から日本は何を学んだかについて解説した。

フォルケホイスコーレは、19世紀半ば、デンマークの民主化への動きの中で、地方農村青年の教育や国民意識の形成などを目的として、グルントヴィ（N.F.S.Grundtvig）らの提唱により設置が進められた。1864年の敗戦後、フォルケホイスコーレ設置運動は、国土の復興と郷土愛の向上などの機運と重なり合い、国内各地に多くのフォルケホイスコーレが設立された。その数は増減を繰り返し、2022年現在、76校である。

フォルケホイスコーレの情報は、日本には20世紀初頭にもたらされた。日本版フォルケホイスコーレの第一号は、1915年、地方自治の振興を図る中堅的人材の養成を目的に設立された「山形県立自治講習所」とされる。その後、「国民高等学校」という名称で国内数カ所に設立されたが、第二次世界大戦敗戦以後、それらは途絶えることとなった。一方、敗戦後の1946年、民主主義の普及などを目的に公民館の設置が始まり、それを奨励した寺中作雄著『公民館の建設』(1946、公民館協会）には、フォルケホイスコーレの教育がデンマークの敗戦後の復活に重要な役割を果たしたことが例示されている。

フォルケホイスコーレは、時空を超えて、日本の教育に影響を及ぼしてきた。国民高等学校と公民館は、その理念や方法を学ぼうとしたが、それらは必ずしも定着したとは言い難く、時とともに変容し、本家フォルケホイスコーレとは大きく異なるものになったと言ってよいだろう。

「人工知能の発展の今後の課題」

教養学部情報科学科
武田　敦志

最近の人工知能技術の発展はめざましく、10年前には不可能だと思われていた社会的課題が人工知能によって解決されることも少なくなくなってきました。特に、画像認識・音声認識・機械翻訳に関する産業分野では十分に実用的な人工知能アプリケーションが開発され、様々な人工知能が我々の生活にとって欠かせないものになりつつあります。

2010年頃までの人工知能とは、対象としている分野の専門家によって知識や判断基準を与えられたソフトウェアのことでした。しかし、この方法では人間が「あたりまえ」と考えている暗黙知を明示的に表現することが難しく、人間と同等の判断能力をもつ人工知能を実現することは困難だと思われていました。しかし、2010年頃から研究が行われてきた深層学習では、人間が知識を人工知能に与えるのではなく、人工知能が大量のデータを学習することで自動的に知識を獲得する手法がとられています。そのため、現在の人工知能は、人間が知っている知識だけではなく、人間が知らない知識も獲得しているため、特定の分野では人間を遥かに超える判断能力を発揮することがあります。

人工知能の判断能力が優秀となったため、人工知能が判断し、人間がそれに従事する事例が発生しています。また、最新の人工知能は芸術の分野でも大きな成果を挙げており、芸術も人工知能に任せた方がよいと考える人もいます。しかし、人間社会の主役は人間でなくてはならず、人工知能が文明や文化の方向を決めるべきではありません。今後は人間と人工知能が共生する新しい社会の形を模索する必要があります。

「コンピュータ・ネットワークの発展」

教養学部情報科学科
杉浦　茂樹

教養学部が設立された1989年には、コンピュータ・ネットワークは極一部の専門家のみが使用するものであった。33年間が経過した現在では、だれもが使用する情報インフラへと発展した。このような変化を技術的な観点からふり返った。

まずは、現代から過去へ遡って「IoT」「クラウドコンピューティング」「サーバの仮想化」などの主要技術を説明することで、対象となるコンピュータ・ネットワークの定義を再確認した。コンピュータ・ネットワークとは、情報機器を互いに接続する技術、または、その技術で接続されたシステム全体と定義される。このことから、規格の標準化が重要であることを理解した。

次に、コンピュータ・ネットワークの規格の概要について説明した。具体的には、代表的な二つの規格であるOSI参照モデルとTCP/IPを紹介した後、現在広く用いられているTCP/IPを構成する「物理ネットワーク層」「インターネット層」「トランスポート層」「応用層」の４つの層それぞれの役割と機能を説明した。

その後、33年間での発展が著しい「物理ネットワーク層」「インターネット層」「応用層」の３つの層について、具体例による数値を用いた比較を通して各規格の進歩を直感的に理解した。

最後に、「国土交通白書2019」の抜粋を用いて、現代だれもが使用している情報インフラが規格の進歩によって実現されていることを確認した。

受講人数は残念ながら少なめであったが、みなさんたいへん熱心に聴講し、一部受講者からは質問もあり有意義な講演となった。

「地域生活とスポーツ」

教養学部地域構想学科
天野　和彦

地域におけるスポーツ活動を、教養学部30周年の記念で振り返るというテーマを頂き、若輩ながら地域スポーツの30年を振り返るなかで、現代社会に通じる「地域とスポーツ」の課題は30年では足りないところに根源があると考え、結局150年にわたって振り返ってしまいました（笑、すいませんでした。さて今回は、まず我が国における所謂近代スポーツの変遷について振り返りました。そして、そのなかで、教育とスポーツの関係性を考察することにチャレンジしてみたので、結果として大政奉還と「学制」の制定にまで遡ることになったのです。Spencer（1860）の教育論から強く影響を受けた森有礼の学制は、所謂三育論として現代社会にも強く根付いており、また当時キリスト教の全人教育を礎とした学校が本学を含めて数多く誕生し、現在もなお体育を重要な教育に位置づけています。そして、身体的発達の体育から、Dewey（1916）の運動による教育へと変遷を遂げながら、運動やスポーツは学校、そして地域で振興されてきたのです。そして、運動部活動の教育効果や価値は、子供の自主性を学校教育のなかで育むことに焦点をあてつつ、教員の地位勧告（1966）、必修クラブ活動（1969-89）、或は総則体育と呼ばれる教科内での扱いという数度の変遷を経て現在の課題に至っています。今般の「運動部活動の地域移行（2022）」で注視すべきは、これまで指摘されてきた効果（今宿ら，2018）が如何に担保できるかだと考えます。結論として重要なのは、地域のスポーツ社会を形成する為に必要な力である自主性や自発性は、運動部活動でこそ醸成されると言うことです。

「現代日本社会における『家族』の変化と持続」

教養学部言語文化学科
津上　　誠

文化人類学では交換には贈与交換（以下Ｂと略す）と市場交換（以下Ｃ）があるとよく言われるのだが、惜しみなき与え合い（以下Ａ）とでも呼べる交換もある。

Ｂは「私のものは私のものだがそれをあなたにあげる」という精神で、Ｃは「私のものは私のものだがそれをあなたのものと取りかえよう」という精神で、それぞれ交わされる。Ｂの交換をする人々は、互いに負い目や感謝を引き受けるので、「他人だがつながりある間柄」を作るが、Ｃの場合は事前商談を伴うので、負い目や感謝の念はことごとく払拭され、「お互い他人で無関係の間柄」を作る。

以上に対してＡは、「私のものはあなたのもの」という精神で交わされる。ジャングルで仕留めたイノシシを背負って村に向かう男は、このイノシシは村で待つあの女のものでもあると思いながら歩く。実際、村に着くと黙ってイノシシを彼女に差し出すが、彼女も当然のようにそれを受け取り、一連の調理をし、当たり前のように彼に料理を差し出す。このような「惜しみなき与え合い」が「お互い他人でない間柄」を作っていく。家族なるものとは、交換Ａによって作られ更新されていくものに他ならない。

さて、現代日本人の頭の中にある「家族らしい家族」というのは実は1950's～1970'sに標準化した。それ以前はＢ世界（村）におかれていたＡ世界が、産業構造の変化ゆえに、初めてＣ世界（都市）の中に置かれ、家族は砂漠のなかのオアシスたる役割を負うことになった。そしてそのきめ細やかなマネージメントこそが女性の仕事となる。付け加えるなら1960年代には恋

愛結婚が多数派となり、こうして男と女の「扶養と尽くし」のやりとりも標準化されることとなった。

以上のような標準的家族像の影響力は計り知れない。しかしその後、子なし家族あり、片親家族あり、ステップファミリーあり、LGBT家族ありと、家族の多様化は進んでいる。標準的家族を懐かしむ声も聞かれる。何が正しいのか？

しかし、正しいことなど決まってはいない。家族を構成する本質は「惜しみなき与え合い」という交換Ａ以外にはないのである。

外国語教育の30年
―― いわゆる第二外国語の場合

教養学部言語文化学科
塚本　信也

「環境」なる語はなかなかの曲者で、少なくとも「私たちを取り巻く環境」と作ると、目的語と化した“私たち”は受け身の存在に、といって語弊があるならば、“環境”と“私たち”の間に境界が画され、引き裂いてしまった印象を抱かせないでもありません。実感として“我たち”は積極的に“環境”にコミットしている気もするので、むしろ「私たち“が”取り巻く環境」と読み替えてみたいところですけれど、如何でしょう。

私の脳裡に浮かんだのは、生物学者であり哲学者でもあったユクスキュルの提唱する「環境」と「環世界」という考え方です。前者は自然一般としてのそれ、後者は各生物に特有のそれで、有り体に申し上げると、同じ環境であれ、生物種によって意味する世界は異なってくる、異なった世界が立ち上がっている、そういうアイデアです。

大学を「環境」と見立ててよいならば、ここに棲息する生物によって意味のある「環世界」―― たとえば四年制大学と短期大学、単科大学と総合大学、X学部とY学部とZ学部等々 ―― もまた異なります。その典型的な指標として、カリキュラムは挙げてよいでしょう。なかんづく、いわゆる第二外国語に対するスタンスは、大学のみならず、日本社会においても、極めて特徴的、象徴的な意味意義を、或いは変容を物語ってくれているように思います。

それでは、昭和・平成・令和の30年あまりにわたる「私たち“を/が”取り巻く中国語教育の変化」について、お話しいたしましょう。